

知的特別支援学校の教室談話分析

—生徒主導の談話シーケンス形成を目指した教師の足場かけに着目して—

東京大学大学院教育学研究科 楠見友輔

問題関心 本研究の目的は、社会文化的アプローチ (Wertsch, 1991) の立場から、知的障害児の能動的学習を促す上での教師による足場かけの機能を分析することである。学習者が他者と協働しながら能動的に学習を行うためには、教室談話シーケンスにおける学習者の関与の機会を増やすことが重要であると言われている (Mayer, 2012)。

これまでの知的障害児教育に関する先行研究において、彼らの能動的学習過程を微視的に分析した研究は少なかった (Keogh & Speece, 2006)。しかし、知的障害児は教師の足場かけを媒介として発達しており (Kraker, 2000)、彼らの学習や発達過程を社会文化的アプローチによって分析することは重要である (Stone, 2002)。

対象授業の目的は、教師の助けを借りずに、他者と協力しながら授業を進行する力を知的障害児が獲得することであった。教師は、インタラクティブホワイトボード (以下 IWB) に司会原稿を表示させて遠隔操作しながら、司会者となった学習者 2 名の授業進行を促す支援を行った。本研究では、一連の授業における教室談話分析を通して、知的障害児が司会をすることができるようになる過程と、その過程における IWB の機能についての分析を行った。

方法 東京都内の知的特別支援学校で 20XX 年の 6~9 月に実施された自立活動の 1 単元の授業をデジタルビデオカメラで記録した。授業担当の教師は 2 名で、中学部 6 名 (12~15 歳) が授業に参加した。そのうち、2 名の抽出児が司会を担当し、教師が遠隔操作する IWB を見ながら司会進行を

行った場面を分析の対象とした。

第一に、抽出児 2 名が談話シーケンスを主導する割合の変化を分析した。IWB が適切に機能した場合には、談話シーケンスにおける教師の主導の割合が減少し、司会者の主導の割合が増加することが予想された。第二に、4 名の聞き手の 1 秒ごとの視線配分を分析した。IWB が適切に機能した場合には、聞き手は教師や IWB よりも司会者に対する注視を増加させることが予想された。

結果と考察 本事例では、1 日目での教師による直接的な指示や説明を経て、2 日目以降において学習者が IWB を見ながら談話シーケンスを主導するようになった。これは IWB が司会者にとって教師の代理 (Warwick, Mercer, Kershner, & Staarman, 2010) として機能したためであると考察された。

司会者の談話シーケンスの主導は、2 名の抽出児の司会者としての自覚を促し、4 名中 3 名の聞き手にとっても教師ではなく司会者が授業を進行しているという意識を生じさせていた。このことから、教師が常に規範や知識を有しているという権威的關係 (Staarman & Mercer, 2010) を変える上で、談話シーケンスにおける主導権の委譲が有効であることが示唆された。

さらに、談話シーケンスの主導権が教師から学習者へと移転する過程を分析すると、初めは教師の意思伝達ツールとして機能していた IWB が、最終的に学習者が能動的に活用するためのツールとして意味を変化させていたことが考察された。